

日中両言語における蓋然性判断のモダリティ

—「かもしれない」「也许」と「にちがいない」「一定」を中心に—

吉田 則夫 ・ 劉 笑明* ・ 申 文亭**

蓋然性判断のモダリティにおいて、「かもしれない」と「也许」、「にちがいない」と「一定」は、話し手が事態に対し不確実性があると判断する形式である。「かもしれない」と「也许」は話し手が命題内容の成立・実現に可能性があると判断する。「にちがいない」と「一定」は命題内容の成立・実現に必然性があると判断する。四つの形式は推し量る形式で、蓋然性の程度によって、「かもしれない」と「也许」は蓋然性が低く、「にちがいない」と「一定」は蓋然性が高い。

「かもしれない、にちがいない」は疑問化できないのに対し、「也许、一定」は疑問文と共に起できるが、純然たる質問文と共に起できない点から、四つの形式が基本的な意味で同じである。また、「かもしれない」と「也许」において、「かもしれない」の意味スコープが単一で、「也许」が文頭、文中および文末に現れるため、意味スコープがその位置変化によって、変化することが分かる。「にちがいない」と「一定」において、人称制限があるが、「一定」は話し手の意志と推測する事態が重なっている場合、主語が一人称である。考察を通して「かもしれない」と「也许」、「にちがいない」と「一定」が意味上にも構文上にも共通点が多く、相違点が少ない。

Keywords : 蓋然性判断, 「かもしれない」, 「にちがいない」, 「也许」, 「一定」

1 はじめに

日本語の蓋然性判断モダリティにおける「かもしれない」、「にちがいない」に関する論考は多く見られるが、中国語の蓋然性判断モダリティにおける「也许」、「一定」との対照研究はあまり多くない。日本語において、三宅（1995）では命題の真偽に関する話し手の認識を表す意味成分のことを「認識的モダリティ」と呼び、認識的モダリティによって可能性判断（かもしれない）、確信的判断（にちがいない）が類型化され、一つの体系を成していると考えられる。仁田（2000）は「認識のモダリティの体系」に基づいて、推し量りを表す「概言」の概念に従っ

て下位分類を試みた。その種類と名づけと対応する形式は次のように示すことができる。

概言	}	推量	だろう
		蓋然性判断	かもしれない、にちがいない
		徴候性判断	ようだ、らしい、しそうだ

また、益岡（2002）は、真偽判断のモダリティの体系は述語の無標形式による「断定」と有標形式による「非断定」の対立からなると捉え、事態が成り立つ蓋然性（確かさの度合い）を表す「かもしれない」と「にちがいない」は蓋然性判断に入れてある。それに「にちがいない」は確かさが非常に高い度合いを表し、「かもしれない」は低い度合いを表

岡山大学大学院教育学研究科社会・言語教育学系 700-8530 岡山市北区津島中3-1-1

*天津外国語大学 300204 天津市馬場道117

**広東科学技術職業学院 519090 珠海市珠海大道

Modality of the Probability Judgment in Japanese and Chinese —focus on [kamosirenai][yexu] and [nitigainai][yiding]—

Norio YOSHIDA, Xiaoming LIU* and Wenting SHEN**

Japanese Language Education, Division of Social Studies and Language Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama city 700-8530

*Tianjin Foreign Studies University, 117 Machang Road Tianjin China 300204

**Guang Dong Institute of Science and Technology, Zhuhai Road Zhuhai China 519090

すと指摘した。つまり、「かもしれない」を「可能性判断」と、「にちがいない」を「必然性判断」あるいは「確信的判断」と定義されたが、性質には不確実性がある命題の真偽を推し量りながら、事柄に対する不確かさの度合いを表すという共通性を持っている。そのため、ここで「かもしれない」と「にちがいない」を同じ種類「蓋然性判断」に属させる立場を取る。中国語では、モダリティを語気と称し、日本語のモダリティ研究よりかなり遅れる。于(2000)によって中国語の蓋然性判断モダリティについては次のように示すことができる。

蓋然性判断 { 蓋然語気 (也许)
必然語気 (一定)

ここで事態の成立・実現に対する不確実性を持ちながら、特定の度合いを持つ「也许」と「一定」^(註1)というモダリティ形式を蓋然性判断にも入れることにする。したがって、本稿は先行研究を踏まえながら、実証的に分析するため、中日対訳コーパス^(註2)およびCCL用例集^(註3)に収録された日中両国の文学作品などから用例を採用し、文末に現れる日本語の蓋然性判断モダリティ形式「かもしれない」、「にちがいない」という表現をめぐって、中国語との対照的分析によって日中両言語の蓋然性判断モダリティの意味と用法および構文の特徴を考察する。

2 「かもしれない」の意味・用法

「かもしれない」の形式について、(益岡・田窪, 1992)は「真と断定できない知識を述べるムード」とされ、森山(1989)、仁田(1991)、益岡(1991)は事態が成り立つ蓋然性(確かさの度合い)の程度が低いことを表す形式であるとされた。仁田(2000)では、蓋然性判断として、「かもしれない」、「にちがいない」を取り上げ、「かもしれない」を「可能性把握」とし、すなわち、「命題内容として描き取られる事態が生起する可能性をもったものであることを示す」と指摘した。また、平田(2001)は「かもしれない」の意味を「推し量り」と派生した「婉曲」に分けた。

要するに、「かもしれない」の意味的記述が「相対的に蓋然性が低い」から「命題が真である可能性がある」へ変わっていく。その「婉曲」意味は「かもしれない」によって表すのではなく、文脈における用法である。

- (1) いまごろは喜助は、作業場で、剝小刀をつかっているかもしれない。(越)
(2) このとき日が雲間を洩れたように思われたが、私の錯覚であったかもしれない。(金)

のように(1)と(2)では、話し手は「喜助が剝小刀をつかっている」、「私の錯覚であった」ということに自信がないために、間接的に事態の成立・実現を推し量ったりすると同時に、成立しない、あるいは実現しない可能性があることを認識したことを表している。つまり、事態の成立に自信がないため、想像や思考をしてから推量する過程が可能になる。すなわち、可能性を表す「かもしれない」には二つの性質を持ち、「推量」と「低い確実性を明示すること」である。それに(1)の「かもしれない」用法を「前置き」としている。このように「かもしれない」の定義を「事態を経験・知識によって間接的に把握しつつ、捉えた情報に低い確実性を明示する」と規定することができる。

(3) 喜助は動顛するにちがいがなかった。いや、そのことをいったら、喜助は狂人ようになって怒るかもしれない。(越)

(4) それは、竿を捨てて、今しも櫓にきりかえた船頭が櫓を押す音だったかもしれない。(越)

のように、(3)ではまだ事態が起こっておらず、未来についての予測やある条件のもとで、事態が起こりうるという予測をする。(4)では過去の事態が成り立つかどうかを推測することもできる。このように、話し手が事柄を断定する確かさを見出せず、確信も持てず、または事柄が成り立つ可能性の度合いが低く、情報が不十分で分からないため、断定ができないという場合に「かもしれない」の使用が可能になる。

(5) もし私が女を踏まなかったら、外人兵は拳銃をとり出して、私の生命をおびやかしたかもしれない。(金)

のように、(5)では「私が女を踏んだから、私の生命を脅かされなかった」という現実事態に反する事態が仮想で推測されることができる。発話時に話し手が未知の事柄を推測する点で「かもしれない」は推量の「だろう」の性質に近い性格を持つと考えられる。しかし、低い確実性を明示する点で推量の「だろう」と異なる。また益岡(1991)、仁田(2000)では、よく蓋然性を表す副詞「もし」などとの共起から「かもしれない」の低い確実性を示すと指摘した。

(6) まず第一に緑さんという人にあなたが強く魅かれるのなら、あなたが彼女と恋に落ちるのは当然のことです。それはうまくいくかもしれないし、あまりうまくいかないかもしれない。(ノ)
のように、(6)では「うまくいく」と「あまりうまくいかない」という矛盾する事態が同じ文に存在する。事物の存在を非明示的に含意できる性質を持ってい

るため、一方の可能性を明示すると同時に、矛盾する可能性を含意できるようにさせることである。「かもしれない」によって可能になる「影」として隠された、いわゆる非明示的な含意を明示的な含意に強くさせる。

(7)急いでいたので、エアコンを切らずに来た {かもしれない/?だろう。}

のように、(7)の「だろう」の不適合性について、仁田(2000)は「記憶を呼び起こせばいいだけの事態、つまり、想像し思考し推論することではじめて捉えられる、といった類の事態ではない事態に対して、定かでなくとも、推量を使うことはできない」(p117)と説明している。しかし、「かもしれない」は単に事態の成立を想像・思考や推論の中で捉えたということを表すだけでなく、「確からしさの度合いへの言及を焼き付けたあり方で表している」と理解することができる。また、記憶の喚起の「かもしれない」と行動予定の「かもしれない」は想像・思考の心的過程を経て可能性があると推測した「かもしれない」と異なり、話し手が記憶の長期と意志によって、低い確実性だけを示している。つまり記憶の「かもしれない」と行動予定の「かもしれない」は典型的な可能性表現「かもしれない」の意味の一般化であり、低い確実性を明示することがこれらの用法と共通である。

このような「かもしれない」の意味が文脈によって、推し量りから「婉曲」へ派生・拡大したが、実は文脈による「かもしれない」の意味は変わらない。「かもしれない」の意味は話し手が発話時に「その事態に可能性がある」と認識しており、「推量」と「低い確実性を明示する」という二つの性質を持っている。また、

* (8)台風(は/が)来るかもしれないか。

のように、「かもしれない」は(8)のような疑問文に使わない。「かもしれない」と判断される確定的な情報はあらためて話し手がその命題を不確定だと捉える疑問文と共起しては矛盾である。これについて森山(1989)に詳しい。

* (9)私は買い物に行くつもりかもしれない。

* (10)私が息子の進学がとても嬉しいかもしれない。

のように、(9)、(10)は全ての事柄の成り立ちを可能性があると判断できるというわけではなく、一人称の主体が主語に立っていないという人称制限にされる。しかし、三人称の場合、過去・非過去の事態にも、主語に立つ主体の意志・感覚または成り行きの事態にも、「かもしれない」の現れに制限はない。また、

(11)まあ、若い私は恨まれるのが当然のようなこともしたかもしれない。(新)

のように、一人称の主体が主語に立っても過去の事態である場合に、「かもしれない」の現れに制限もない。

? (12)お前は買い物に行くかもしれない。

* (13)君は足が痛いかもしれない。

のように、述べ立て内容が聞き手の決意の存在である場合、話し手から聞き手への実効的な情報伝達といった伝達機能論的な点から対話で通常の述べ立て文としては成り立ちがたい。それに対し、二人称の主語は成り行きの事態である場合、「かもしれない」の述べ立て文が成り立つ。例えば、

(14)君は不愉快になるかもしれない。

(<http://search.yahoo.co.jp> 2009/12/30)

(15)お前も少し大人になって、玲子と徹也の仲、許せるようになったかもしれない。

(<http://search.yahoo.co.jp> 2009/12/30)

のように、聞き手の意志を知らぬ成り行きの事態であることによって、聞き手にとって必ずしも了解済みのことではなく、また、話し手にとっても、確かなことであるとは限らず、さまざまなあり方で推し量ることによって捉えなければならない場合も生じてくる。

「かもしれない」の基本的な意味は事柄の成り立ちに可能性があると判断することであり、「推量」と「低い確実性を明示する」という二つの性質を持っている。「もしかしたら、ひょっとしたら、必ずしも」などの度合いの低い「副詞」との共起から説明できる。「かもしれない」の「婉曲表現」は「低い確実性を明示する」性質から実際の文脈によって発生したものである。

3 「にちがいない」の意味・用法

「にちがいない」の形式について、寺村(1984)では概言助動詞として「だろう」、「かもしれない」より確信度が高く、独白的な使い方があると指摘された。益岡(1991)、仁田(1991)では、「にちがいない」を推量形式であると同時に蓋然性が高いと捉え、その蓋然性の高さをよく蓋然性の高い副詞との共起から説明している。この捉え方は「にちがいない」の本質的な意味をある程度まで把握したが、無標形式で表される「確信的判断」に比較すれば、ニュアンスから確信の程度がすこし低いと考える。また、仁田(2000)では「にちがいない」を命題内容として描き取られている事態の生起・実現の確率がきわめて高いことを示し、そして事態の成立をきわめて高い確率から想像・思考や推論の中で捉えていることを表した。本稿は仁田(2000)と同じように、「にちがいない」の本質的な意味を事柄の

真または偽に対する必然性認識であると捉える。従来の研究とすこし違い、「にちがいない」が「推量」と「高い確実性を明示すること」の二つの性質を持つことを明確にしたい。

(16)長城の建築技術を説明すれば首をかしげられるにちがいない。(流)

(17)もし何処かへ、無電で機動部隊の動向を通報するような徴を見せたら、この船はおそらく、二、三分後に海底へ消し去られてしまったにちがいない。(山)

のように、(16)では長城の建築技術を説明するという条件を設定し、「首をかしげられる」ことを予測することができる。もちろん、反事実の事柄を推測することもできる。(17)では実際の事柄は「この船は海底へ消し去られなかった」に対し、「もし…」という条件を設定し、「にちがいない」によって「この船は二、三分後に海底へ消し去られてしまった」の事柄が必然になるという反事実の事柄を推測した。未知のことを予測・推測できること、いわゆる推量ということは「にちがいない」の一つの性質である。

また、「にちがいない」における「高い確実性を明示する」性質は「きっと」「かならず」などの蓋然性が高い副詞との共起が多い。

(18)お繁さんはきっと家に居ないに違いない。(浜)

(19)安田は二十日の上野発十九時十五分の「十和田」で青森に出発したと言っているから、彼はかならず二十日の午後までは東京にいたに違いない。(点)

蓋然性を表す副詞「きっと」「かならず」は確信の度合いが高いと考えられ、「にちがいない」との共起から見れば、より一層事態の成立に高い確実性を示せる。つまり、「にちがいない」が「推量」と「高い確実性を明示する」という二つの性質を持っている。結果として、「にちがいない」は事態の成立・実現に対する必然性があると認識することである。

(20)海は落下弾のために沸き立っており、うかうか飛びこめば皮も骨もひきちぎられてしまうにちがいなかった。(坂)

のように、「にちがいない」は過去形を持っている。また、

* (21)台風(は/が)来るにちがいないか。

のように、「にちがいない」は疑問文に使わない。「にちがいない」は「かもしれない」の疑問化不可能の問題と同じである。「にちがいない」によって判断される確定的な情報はあらかじめ話し手がその命題を不確定だと捉える疑問文と共起しては、矛盾であるということが分かる。

* (22)僕は学校へ行くつもりにちがいない。

* (23)私は娘の進学がとても嬉しいにちがいない。

のように、「にちがいない」によって話し手が事柄の成立・実現に高い確実性を持って判断するため、(22)、(23)のような、全ての事柄の成り立ちを必然性があると判断できず、話し手が一人称の主語に立てない。いわゆる決意が自分の現在の心的態度である。それが意識を有する人間にとっては自明であるため、話し手自身があらためて推し量る必要がないからである。その述べ立て内容は話し手が自分を振りかえすれば、自明になるような現在の感情・感覚といった内的状態を表しているので推し量る必要がない。(22)、(23)のような、「にちがいない」には述語の現在形で一人称主語の場合に制限がある。つまり、話し手にとって自覚的な現在の内的状態を表す場合、制限があり、推し量る必要がないので、制限を生じてくる。

(24)おそらくこの男は、仲間たちを裏切ったように私を売るにちがいない。(沈)

(25)小野もどこかの試験場に居たに違いない。(青)のように、三人称の場合、過去・非過去の事態にも、主体の意志・感覚または成り行きの事態にも、いずれも推し量る形式の現れに制限はない。また、一人称の話し手が過去の事態である場合、「にちがいない」の現れに制限もない。

(26)言葉足らずな文に気がつかない私はやっぱり疲れてたにちがいない。

(<http://search.yahoo.co.jp> 2010年1月7日)

また、二人称の場合、聞き手の決意や聞き手の自覚的な感情・感覚を表す述べ立て文に「にちがいない」の出現も許容できる。

(27)お前はきっと、看病や罪滅ぼしに心を砕いているに違いない。

(<http://search.yahoo.co.jp> 2010年1月7日)

のように、「にちがいない」は一定の根拠から推し量っており、高い確実性を持つことができるため、事柄の成立への必然性も表すことができる。対話において、ある程度の根拠を持って二人称のことを推し量っても不自然ではない。また、事態の実現を決定する聞き手の決意の未来における実現を表す場合にも、現在における聞き手の自覚的な内的状態の存在を表す場合にも、感覚・感情の述語の現在あるいは過去を取った場合にあっては、成り行きの事態である場合にも、許容できる。

(28)お前はいま、何か企んでいるに違いない。

(<http://search.yahoo.co.jp> 2010年1月7日)

(29)お前は今、俺の悲哀を救い上げようなどと身分不相応な事を思ったに違いない。

(<http://search.yahoo.co.jp> 2010年1月7日)

要するに、「にちがいない」の基本的意味は話し手が事柄の真偽に必然性があると判断することである。その必然性判断には二つの性質があり、つまり「推量」と「高い確実性を明示すること」である。推量は事柄の真偽が直接に判断できないため、間接に判断できることである。また、「きっと」などの蓋然性が高い副詞との共起から「にちがいない」の高い確実性が見られる。

4 「也许」の意味・用法

「也许」の意味について、呂(1980)の『現代漢語八百詞』には「A.表示猜测或不很肯定(推測または不確実性を持っている)。B.表示委婉,说话人有商量的意思。(婉曲的な意味を表し、相談の意味が入っている)」とある。中国語は孤立語であり、文法は並ぶ順序によって意味・機能を表す。語気助詞は文頭、文中および文末に出現することができる。しかし、文末に現れる場合は少ない。

(30)她也许思前想后,一夜无眠,今早起来,她还得依旧支撑。(关)

(こんな具合にあれこれと思いめぐらせ、妻は夜もおちおち眠れないのかもしれない。)

(31)今后的几十年,中国也许会变个天翻地覆。(活)
(今後の数十年の間に中国には天変地異の変化が起こるかもしれない。)

(32)她勉强笑笑,又勉强笑笑:“也许正像你说,没办法的事太多。”(插)

(彼女は無理に微笑んで見せた。そして同じようにもう一度。「あなたの言う通りかもしれない。世の中しかたのないことばかり」)

(33)也许上山下乡运动之所以失败,正是因为那是一场人为的运动吧?我这样想。(插)

(あるいは上山下乡運動の失敗の原因はあれが人為的な運動だったからかもしれない。私はそう考える。)

のように、(30)~(33)では、「也许」は話し手が事態の内容を直接に把握することができず、想像・思考の中で推測し、その確実性が低いということである。結果として事態の成立に可能性があると判断する。そのほか、(31)の「也许」は事態の未来の実現も実現済みも推量することができる。

(34)30年前的一张收条。也许,魏石头稍通文墨,知道个大意,没好意思把它交到煤窑工会,可他还是把它当宝贝似的留起来了。(盖)

(この紙片は、三十年前の一枚の受領書だったのである。ひょっとすると魏石頭はいくらか文字を知っていてこの文章の大意を知り、これを炭鉱の組合に手渡すのが照れくさかった

のかもしれない。)

のように、(34)の「也许」は推測の事態が矛盾の形で一つの文に現れることができる。そこから確実性があまり高くないということが分かる。「也许」は話し手が事態に対する可能性があると判断する表現形式である。この「可能性」を表す意味に、「推量」と「低い確実性を示す」という二つの性質がある。婉曲の用法が「也许」の意味ではなく、文脈における機能であると考えられる。それに語気副詞の「也许」が文頭、文中および文末に現れることができる。

(35)也许,这不是我们这辈人的事,后人会比我们看得清楚(譬如眼前这个小姑娘),会给出一个冷静的判断,不像我们带了那么多感情……(插)

(だがそれはわれわれの世代の役目ではないかもしれない。後世の人のほうがわれわれよりはっきりそれを見極め(たとえば目の前の女の子のように)、冷静な判断を下し、われわれのように感情に流されずにすむだろう……。)

(36)他去牙科医院的时候甚至心怀侥幸,祝祷也许医师不在,也许医药不全,因而不能拔牙。能拖延一下也好。(活)

(彼は歯医者へいく時いつも先生が留守だといひ、薬が揃っていなければいいと祈った。)

(37)这成为长久以来的一个有趣的话题,成为童年的一粒扔上屋顶的乳牙般的温暖,和幽默,也许。(活)

(それは後々までのお笑い草となり、幼年時代屋根に放り上げた乳歯のような温もり、そしてユーモア、とも言えよう)

のように、前節に矛盾事態が一つの文に存在することは「也许」の構文特徴の一つである。また、矛盾事態だけでなく、複数の事態が現れる。例えば、

(38)似乎在树端坐着一个人。也许是云端?也许是天上的一个座席?(活)

(梢に人が坐っているようだ。いや雲の切れ端かな。それとも天上の玉座か。)

次に、「也许」は「述べ立て」文に現れる以外、疑問文にも現れる。

(39)也许原来真的是自己看错了?也许这一切都是机会造成的。(活)

(これはお見逃れしていたか、それともチャンスなのなせる業か?)

(40)这么说,我们来到了H市了?我也许可以找到史福岗教授了吧?(活)

(いよいよH市か。史福崗教授に会えるかも知れませんか)

のように、(40)では「吧」との共起から見れば、「找到史福崗教授」に不確実性を持ちながら、聞き手に

そういう可能性があるかと答えて欲しい。それらの疑問文が疑問符「？」をつけても、純然たる疑問文ではない。「也许」の疑問文では、疑問符「？」か文末語気詞、または疑問符、文末語気詞と一緒に共起する場合がある。しかし、「也许」は疑問文に使われる時に、語気詞「吧」との共起頻度が高い。しかし、次のような語気詞「吗」との共起は不自然である。

* (41) 他也许是广东人吗？

のように、(41)のような純然たる疑問文では、「也许」は「吗」と共起できない。純然たる疑問文は命題に対する判断が不確定であるため、聞き手に尋ねることであるが、「也许」が命題に対する推測し、命題の内容となる情報に単に不確実性を持っているため、その情報自身が話し手にとって確定の情報である。

さらに人称制限について、推測を表す語気副詞がよく二人称・三人称の主語とする文に現れ、一人称の主語である文にあまり現れない。なぜなら、推測は話し手が他人のこと、事柄の不確実性に可能性があることを生じやすい。

5 「一定」の意味・用法

「一定」の意味について、呂(1980)の『現代漢語八百詞』には「A. 表示所做的判断或推论确凿无误, 自信会如此, 必然。(話し手は自分の判断または推論は間違いなく、必然的であることを信じている。) B. 表示态度坚决, 要求自己、对方、别人或包括自己在内的‘我们、大家’做或不做某事(態度は強い。自分、相手、自分または周りの人がするように、またはしないように要求する。)」とある。例えば、

(42) 我想, 我那位喂牛的老伙计临终时一定是松心的, 这也好。(插)

(私はこう思った。あの牛飼いのじいさんは臨終の時きっと安心していただろう。それもまたいい。)

(43) 两个星期以后, 丈夫托孩子传话, 一定要和她谈一谈。(活)

(二週間後、夫は子供を通じてぜひ話しあいをしたいと申入れてきた。)

本稿では、(A)の「一定」を推測の「一定」と呼び、(B)の「一定」を意志の「一定」と呼ぶ。「一定」は話し手が事柄の成立に必然性があると判断する。未実現の事態にも、実現済みの事態にも、話し手が事態の成立・実現に不確実性を持っているのに、その必然性があると判断する。

(44) 他明天一定会来的。

(彼は明日、きっと来る)

(45) 王先生刚刚来到, 一定乏了, 横竖将来我们谈话的机会多得很, 还是先带你看看你的屋子吧。(关)

(王さんは、いらしたばかりできっとお疲れね。

どのみち、お話はゆっくりうかがえますわ。

先にお部屋をお見せしましょう)

のように、(44)は将来の事態と(45)のような、実現済みの事態を推測することができると同時に、高い確実性を示している。また、実際の文脈に、話し手が何よりもこういう必然性であると確信している。例えば、

(46) 我们的目标一定要一定达到! 我们的目标一定能够达到!

(私たちの目標は達成される、必ず達成することができる。)

(47) 中国政府正在采取有效措施, 中国一定能控制住禽流感。

(中国政府は今積極的に対策を取っていることからみて、中国はきっと鳥インフルエンザをコントロールすることができるにちがいない。)

のように、(46)では「我们的目标一定要达到!」は話し手の意志を表し、また、推測の「一定」は「我们的目标能够达到」という事態が必然なことであると強調する。未来の事態に対し、強く望んでいるので、必然性があると判断した。それは前の文脈の話し手の意志と重なっていることになり、相まって強調の意味を生じた。

(48) 他一定高兴吗? 现在他们一定全都到家了吗?

(彼は喜ぶのだろうか。彼らは今ごろ全員家についたのだろうか。)

(49) 是继母就一定出卖女儿吗?

(継母だから娘を裏切るのだろうか。)

(50) 哎, 你会弹琵琶, 那也一定会弹吉它吧?

(あら、琵琶が弾けるの? それじゃ、ギターもきっと弾けるんだよね?)

(51) 布吉的明天一定会更好!

(きっと布吉の明日はもっと美しくなる!)

推測の「一定」は疑問文にも現れるが、(48)、(49)のような文に「一定」は疑問符「？」と文末疑問詞と共起できるが、意味上、話し手が自分の判断を聞き手に確認してもらう。「一定」を削除するなら、普通の疑問文になれるが、「一定」を付けると、否定の意味になり、反問の意味になる。つまり純然たる質問文ではない。(50)のような感嘆文に「一定」が現れるが、それは推測の「一定」によって事態の成り立ち・実現を強く信じている。「一定」の現れる感嘆文には、自分の意志と推測することの重なる場合が多い。(51)の「一定」は未来のことを強く信じ、その必然性を強調して推測する。人称制限について、

述べて文では、推測の「一定」がよく三人称の主語と共に起す。

要するに、「也许」、「一定」はどちらも話し手が命題内容となる事態に対し、自分の想像・思考で不確実性を持ちながら推し量る形式である。「也许」は話し手が事態の成り立ち・実現に可能性があるかと判断する形式であり、「一定」は事態の成り立ち・実現に必然性があると判断する形式である。「也许」が「推量」と「低い確実性を明示する」を持つことに対し、「一定」が「推量」と「高い確実性を明示する」を持っている。また、両形式は疑問文と共に起すが、純然たる質問ではなく、推測疑問文である。

6 「かもしれない」と「也许」

52) 庫裡の三疊で、慈念がどうしているかを見たかったのだった。もう眠ったかもしれない。(雁)
(在僧房門旁三鋪席的房间里，慈念现在在干什么呢？她想去看看。慈念也许已经睡了？)

53) 不过总是心神不安定，走过去之后要活动活动脖子。她们迎面碰上我们多半是低下头。也许这对脖子要好一些。(插)

(だが心は落ち着かず、通りすぎた後で首をちょっと動かしてみたりする。正面から女子が来た時はたいてい下を向く。こうしたほうが首は楽かもしれない。)

54) 也有人不去敲盆敲罐。也许是不那么信奉神灵，也许是受惯了生活意外的掠夺。(插)

(鉢や壺を叩かない人もいる。神をそれほど信じていないのかもしれないし、生きていく上での予想外の掠奪に慣れきってしまったのかもしれない。)

のように、「かもしれない」は話し手がその事態の可能性があると認識し、その事態生起の可能性を描き出すことによって、事態の成立を不確かなもの、可能性程度の確からしさのものとして捉えていることを表す。「也许」の基本的な意味はそれと同じく、両形式が同じ性質を持っている。

また、文脈から見れば、「かもしれない」と「也许」がどちらも婉曲の表現を持っている。構文上から複数の可能性がある事態を表せるため、両者は同じ働きを果たすことが分かる。しかし、両者は疑問文に使われるかどうかによって、相違点が示される。次の「かもしれない」文は不自然であり、中国語と対応しない。

*55) ああ論文は間違っているかもしれないか。

(那篇论文也许有错误吧。)

のように、「かもしれない」の疑問文では話し手がその命題内容に対する判断を放棄し、判断を不確定

なものとして捉えている。その原則によると、内容に対する話し手の捉え方は同一の文中である限り、一致しなければならない。したがって、55)の日本語文は成立しないが、中国語文は成り立つ。なぜなら、「也许」は疑問文に現れる場合、文末詞の「吧」、「呢」、「了」との共起頻度が高く、日本語の「だろう」、「だろうか」に当たる。

56) 也许是县城到清平川的路断了？发了洪水，邮件送不去？也许是拆开信，却记不起我是谁了？(插)

(県政府の町から清平河へ通じる道が通行不能になったのだろうか。洪水で郵便が届かないのだろうか。)

のように、「也许」が疑問文に現れるが、純然たる質問と共に起できない点で「かもしれない」と同じである。また、「也许」が文中、文頭に現れることができる。そこから意味の差が出てくる。例えば、

57) 也许小李来。

(李さんが来るかもしれない。)

58) 小李也许来。

(李さんは来るかもしれない。)

のように、57)は「李さんが来るかもしれないし、他の人が来るかもしれない」という意味を表しているが、58)は「李さんが来るかもしれないし、来ないかもしれない」の意味になる。「也许」は文の位置づけによって、話し手の強調する焦点が変わる。57)では、強調する焦点が「小李来还是别人来」であり、58)では、強調する焦点が「小李来还是不来」である。それに対し、「かもしれない」が文末に現れているので、強調する焦点を起す現象が見られない。

7 「にちがいない」と「一定」

59) 部屋のなかから吹きとばされたに違いない。

(黒)

(这一定是从房间里刮出来的。)

60) 白雪公主的形象十分辉煌。倪萍常常想象当她入睡以后白雪公主与她的七个侍从会活起来。白雪公主穿着裙子，她一定会跳舞，她一定会说外国话。(活)

(白雪姫は目の醒めるような美しさだった。夢の中で白雪姫や七人の家来たちとお話したい、と倪萍はよく空想したものである。白雪姫はスカートをはいているから、きっと踊りができ、外国語を話せるにちがいない。)

のように、「にちがいない」と「一定」は話し手が事態の成立・実現に必然性があると判断するものである。両方とも、「推量」と「高い確実性を持つ」という性質を持っている。

(6)是继母就一定出卖女儿吗？

* (継母だから娘を裏切るにちがいないか。)

のように、疑問文では、「にちがいない」が疑問化できないことに対し、「一定」が純然たる疑問文に出現できないが、推測の疑問文に現れる。それは「也许」と同じく、一種の確認要求の意を表す。そのほか、人称制限では「にちがいない」が三人称と二人称の述べ立て文に出現できるが、主語が一人称である場合、制限がある。しかし、話し手の意志的動作遂行の話し手の決意を表す場合、「にちがいない」は現れにくいことに対し、「一定」は自分の意志を望んでいることが重なる場合にも使われる。

要するに、意味上「かもしれない」と「也许」、「にちがいない」と「一定」は話し手が命題に現れる事態の成立・実現する確実性の程度を推し量りながら、判断する。「かもしれない」と「也许」は話し手が命題内容にある事態の成立・実現に可能性があると判断する。それに対し、「にちがいない」と「一定」は命題内容の成立・実現に必然性があると判断する。四つの形式は推し量る形式であり、蓋然性の程度によって、「かもしれない」と「也许」は蓋然性が低く、「にちがいない」と「一定」は蓋然性が高い。

構文上「かもしれない」、「にちがいない」は疑問化できないことに対し、「也许、一定」は疑問文と共起できるが、純然たる質問文と共起できない点から、四つの形式が意味的に同じである。

8 おわりに

本稿は、日本語における蓋然性判断を表す文末のモダリティ形式「かもしれない」、「にちがいない」と中国語における蓋然性判断を表すモダリティ形式「也许」、「一定」との対照の立場から、意味・用法および構文の特徴を考察した。

「かもしれない」、「にちがいない」は事態の成立・実現に対し、不確かさを持ちながら、判断する形式である。「かもしれない」、「にちがいない」には「推量」、「確実性を明示する」という二つの性質を持っている。確実性の高さによって、「かもしれない」は低い確実性を明示し、「にちがいない」は高い確実性を明示する。「かもしれない」は推し量りから派生した「婉曲」意味を生成する。「かもしれない」と「にちがいない」は疑問化できず、人称制限がある。

「也许」、「一定」はどちらも話し手が命題内容となる事態に対し、自分の想像・思考で不確実性を持ちながら推し量る形式である。「也许」は話し手が事態の成り立ち・実現に可能性があると判断するモダリティ形式であり、「一定」は事態の成り立ち・

実現に必然性があると判断するモダリティ形式である。「也许」は「推量」と「低い確実性を明示する」という性質を持っていることに対し、「一定」は「推量」と「高い確実性を明示する」という性質を持っている。

「かもしれない」と「也许」、「にちがいない」と「一定」について、意味上からすれば、「かもしれない」と「也许」、「にちがいない」と「一定」は話し手の事態に対する認識である。「かもしれない」と「也许」は話し手が命題内容の成立・実現に可能性があると判断する。「にちがいない」と「一定」が命題内容の成立・実現に必然性があると判断する。四つの形式は推し量る形式であり、蓋然性の程度によって、「かもしれない」と「也许」は蓋然性が低く、「にちがいない」と「一定」は蓋然性が高い。

構文上からすれば、「かもしれない」「にちがいない」は疑問化できないのに対し、「也许」「一定」は疑問文と共起できるが、純然たる質問文と共起できない点から、四つの形式が意味的に同じである。

「かもしれない」の意味スコープが単一であり、「也许」が文頭、文中および文末に現れるため、意味スコープがその位置によって、変化することが分かる。「にちがいない」と「一定」には人称制限があるが、「一定」は話し手の意志を推測する事態が重なっている時、主語の主体が一人称である場合が多くなる。それに対し、「にちがいない」は一人称との制限がかなり高く、両者の間に微妙な違いがあり、「一定」はもっと主観的である。

注

- (1) 本稿ではモダリティを表す副詞「也许」、「一定」を考察の対象とする。「也许」は不定を示すといった事態の蓋然性を表し、「一定」は断定と意志を示すといった事態の必然性を表す。
- (2) 北京日本学研究中心によって開発された「中日対訳コーパス」を指す。
- (3) 北京大学中国語学研究中心によって開発された「CCL例文集」を指す。

用例出典の略称

- (山) 「山本五十六」
- (流) 「流亡記」
- (越) 「越前竹人形」
- (ノ) 「ノルウェーの森」
- (雁) 「雁の寺」
- (点) 「点と線」
- (金) 「金閣寺」
- (黒) 「黒い雨」

(坂) 「坂の上の雲」
 (沈) 「沈黙」
 (新) 「新源氏物語」
 (青) 「青春の蹉跎」
 (插) 「插队的故事」
 (盖) 「盖棺」
 (关) 「关于女人」
 (活) 「活动变人形」
 (出典のない用例は母語話者に確認してもらったものである。)

参考文献

- 市川保子 (1991) 「属節と「にちがいない」「はずだ」「べきだ」「わけだ」上級レベルの学生の誤用を通して」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』 pp.19-33 筑波大学
- 于 康 (1999) 「現代中国語の命題構造の階層性」『言語と文化』 3, pp.11-27 関西学院大学
- 于 康 (2000) 「現代中国語のモダリティ構造の階層性」『言語と文化』 pp.67-81 関西学院大学
- 于康・張勤 (2000) 『語気詞と語気』 pp.157-176 好文出版
- 尹 相実 (1998) 「「カモシレナイ・ニチガイナイ」に関する一考察」『国語国文研究』 5号, pp.44-57 北海道大学国語国文学会
- 須賀一好 (1995) 「「かもしれない」の意味と蓋然性」『山形大学紀要 (人文科学)』 13巻5号, pp.79-88 山形大学
- 杉村 泰 (1980) 「蓋然性を表す副詞と文末のモダリティ形式」『言語文化論集』 pp.99-111 名古屋大学総合言語センター
- 杉村 泰 (2003) 「続・カモシレナイとニチガイナイの異質性—コーパス調査の結果から」『言葉と文化』 4, pp.261-276 名古屋大学言語文化部言語文化研究科日本言語文化専攻
- 杉村 泰 (2004) 「事態の蓋然性と判断の蓋然性再考」『ことばの科学』 pp.117-138 名古屋大学言語文化研究会
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』 くろしお出版
- 玉地瑞穂 (2005) 「日本語と中国語のモダリティの対照研究—言語類型論の観点から—」高松大学紀要44, pp.17-54 高松大学
- 中島孝幸 (1993) 「確かさの度合い—カモシレナイ・ニチガイナイ」『三重大学日本語学文学』 4, pp.13-20 三重大学日本語学文学研究室
- 仁田義雄 (1981) 「可能性・蓋然性を表す擬似ムード」『国語と国文学』 58-5 東京大学国語国文学会
- 仁田義雄 (1991) 『日本語のモダリティと人称』 ひつじ書房
- 仁田義雄 (2000) 「認識のモダリティとその周辺」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩『日本語の文法3モダリティ』 岩波書店
- 野田尚史 (1984) 「「にちがいない/かもしれない/はずだ」『日本語学』 3-10, pp.111-119 明治書院
- 播磨桂子 (1998) 「「かもしれない」の成り立ちについて」『日本文学研究』 pp.191-207 梅光学院大学
- 平田真美 (2001) 「「かもしれない」の意味—モダリティと語用論の接点を探る」『日本語教育』 108号 日本語教育学会
- 牧原 功 (1994) 「蓋然性判断のムード形式と疑問化」『言語学論叢』 第13号 筑波大学
- 益岡隆志 (1991) 『モダリティの文法』くろしお出版
- 益岡隆志・田窪行則 (1992) 『基礎日本語文法』くろしお出版
- 益岡隆志 (2002) 「判断のモダリティ—現実と非現実の対立—」『日本語学』 21-2 明治書院
- 三宅知宏 (1992) 「認識的モダリティにおける可能性判断について」『待兼山論叢日本学編』 26, pp.35-47 大阪大学文学部
- 三宅知宏 (1993) 「認識的モダリティにおける確信的判断について」『語文』 61, pp.36-46 大阪大学国語国文学会
- 三宅知宏 (1995) 「ニチガイナイとハズダとダロウ」「カモシレナイとダロウ」宮島達夫・仁田義雄『日本語類義表現の文法』 pp.190-200 くろしお出版
- 森山卓郎 (1989) 「認識のムードとその周辺」仁田義雄・益岡隆志『日本語のモダリティ』くろしお出版
- 呂 叔湘 (1980) 『現代漢語八百詞』 商務印書館
- 齐 沪扬 (2002) 『語気詞与語気系統』 安徽教育出版社
- 张 谊生 (2003) 『現代漢語副詞研究』 学林出版社
- 徐 晶凝 (2008) 『現代漢語話語情態研究』 昆仑出版社